



第四病棟入り口横にて撮影 (サルスバリ)

TMCcalendar

2010年 10月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	若手	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	MTE	27	講義	29	30
31						

2010年 11月

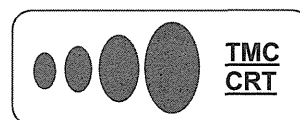
日	月	火	水	木	金	土
	MTE	2	3	4	若手	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	講義	20
21	22	23	講義	25	26	27
28	29	30				

MTE…Meet the Expert
 講義…2010年実践講座通常講義
 若手…若手育成カンファレンス

ご意見ご感想はこちら E-mail : tmcnews@ncnp.go.jp

独立行政法人 国立精神神経医療研究センター
 トランスレーショナルメディカルセンター
 〒187-8551 東京都小平市小川東町4-1-1
 TEL.042-341-2711 (代表) /FAX.042-346-1778

編集企画：
 掛井 基徳、中川 敦夫
 中林 哲夫、松岡 豊
 編集企画協力：
 石川 有希
 編集顧問：
 武田 伸一



TMCNews

コンテンツ

- ・ 第三回若手研究グループ紹介
- ・ 第五回・第六回
若手カンファレンス報告書
- ・ 実践講座案内
- ・ ジャーナルスクリーニング
- ・ お知らせ

Vol. 3

若手研究グループ紹介

第三回

若手研究グループの方々からの、研究に対する抱負や支援活動に対する思いなどを語って頂きます。



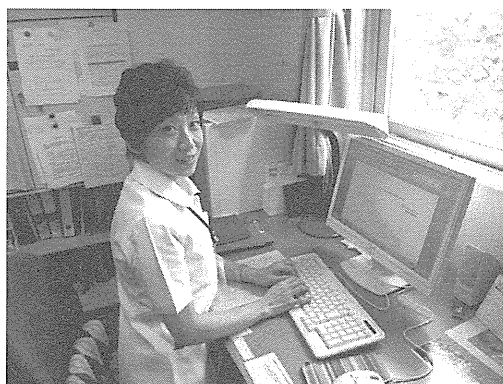
転倒防止プロジェクト

伊藤グループ (A班)

昨年、「精神科疾患患者の転倒転落アセスメントシートの開発」に取り組み、40あったアセスメント項目を9項目に絞りました。そして、今年、その改訂版アセスメントシートの信頼性の分析を行っています。毎回の指導で、やっと、統計分析結果が来月にも出せそうです。その結果を「投稿」、その次は「介入研究」へと、研究の流れを実際を通して学ばせていただいています。

介入研究で、転倒転落件数がどのように変化していくのか、患者さんに安全な療養環境を提供できるのか、今から楽しみです。

医療安全管理室 伊藤淳子



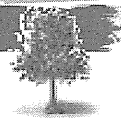
森グループ (B班)

縁取り空胞を伴う遠位型ミオパチー (DMRV) 自然歴臨床調査



長期経過のミオパチー・筋ジストロフィーは希少疾病で治療効果がすぐ現れないため、治験にはhistorical controlの確立が必要です。そのため、当センターで薬物治療が発見された「縁取り空胞を伴う遠位型ミオパチー」の患者さんの自然歴評価研究を行っています。治療がなかった分野に、治療を前提に研究できることは素晴らしいことだと思います。

神経内科 医師 森まどか



11月

若手研究グループA班の進捗状況

山野グループ

- ・精神科領域における感覚調整室 Sensory Modulation Room

患者さんの身体感覚に働きかけ、お薬や拘束を行わずに落ち着きを取り戻して頂くための部屋の効果を調べ、使用方法を確立します。

感覚調整室の実施可能性を検討するパイロット研究について10月の倫理審査委員会に提出

坂元グループ

- ・パーキンソン病に対するLSVT®BIG推進

パーキンソン病患者さんは身体の動きが萎縮してしまうことが知られています。そこで四肢を大きく動かすトレーニングで患者さんの歩行や動作などを改善するプログラムの効果を調べます。

LSVT®BIGの実施可能性検討のためのパイロット研究について10月の倫理審査委員会に提出

大柄グループ

- ・精神科病棟における患者が必要とされる看護量の評価尺度について看護必要度とメニンガー患者分類表を用いた評価尺度を試みて

これまで使用されてきた一般診療科用のリストに替わって、精神科の患者さんの症状に応じた看護に必要な時間を調べるためのチェックリストを作成します。

メニンガー患者分類の原文について翻訳・利用許可の問い合わせ、倫理申請準備

岩田グループ

- ・デュシェンヌ型筋ジストロフィーの立位訓練についての研究

デュシェンヌ型筋ジストロフィーの患者さんが自宅で立ち上がった姿勢を維持する訓練を行うための機器を導入し、その効果を調べます。

立位訓練のパイロット研究について11月の倫理審査委員会に提出。さらに関連研究についても倫理審査準備中。

伊藤グループ

- ・転倒転落防止プロジェクト

入院患者さんが病院内で転んでしまう危険度を測定するチェックリストが本当に危険を予測できているかを検討し、より良いものに作り替えます。

現行転倒防止調査票で本年1月～7月に収集したデータの解析中。論文投稿を目指すと共に調査項目の絞り込みを行い、転倒予防研究を進める。



若手育成カンファレンス報告書



第5回

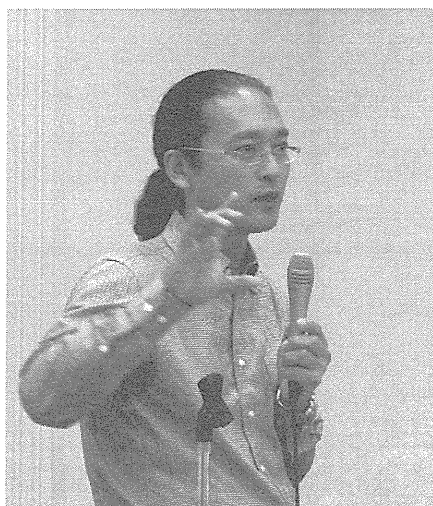
2010年10月15日に研究所三号館にて第五回若手カンファレンスが開催されました。今回は精神保健研究所 知的障害研究部の崎原さん、そして神経研究所 疾病研究第二部の井上さんからの発表がありました。

崎原さんは、健常成人の顔面像の自己、既知、他己認知について注目し、顔の認知に関連する脳機能イメージング技術を用いた研究結果の報告を行いました。そのなかで、顔面であると認識して符号化する脳活動領域、顔の既知性を判断する脳活動領域、自他識別を行う脳活動領域がそれぞれ異なっていることが示されました。

今後は、対象を広汎性発達障害者等にひろげ、顔のもつ意味情報の処理や意味情報の統合の解明に応用できればと述べられました。



精神保健研究所 知的障害研究部
崎原 ことえ



神経研究所 疾病研究第二部
井上 健

井上さんからはペリツェウス・メルツバッヘル病（PMD）に対するクルクミン（ウコンに含まれる黄色い色素成分）を用いた治療開発への取り組みについて発表がありました。PMDはX染色体上に原因遺伝子を持つ遺伝病であり、髄鞘を形成するオリゴデンドロサイト中に異常タンパクが集積し、髄鞘の形成が阻害されることが知られています。

クルクミンを経口投与することでPMDモデルマウスの寿命の延長が観察された結果を基に、今後の治療への応用についての展望が述べられました。

両演題とも臨床応用への期待がなされ、それを踏まえて活発な質疑応答が行われました。

今回で若手カンファレンスは五回目の開催となり、回を追うごとに自由闊達な雰囲気での意見交換がなされています。今後もますます臨床家や研究者の交流が盛んに成る事が期待されます。



第6回

翌11月5日、第六回若手育成カンファレンスとして、病院治験管理室の中林さん、精神保健研究所 精神薬理研究部の斎藤さんのお二人により発表が行われました。



センター病院 治験管理室
中林 哲夫

中林さんは厚生労働省の「抗うつ薬の臨床評価方法に関するガイドライン（案）」の作成に携わった経験を基に、本ガイドラインが作成された背景についてお話されました。

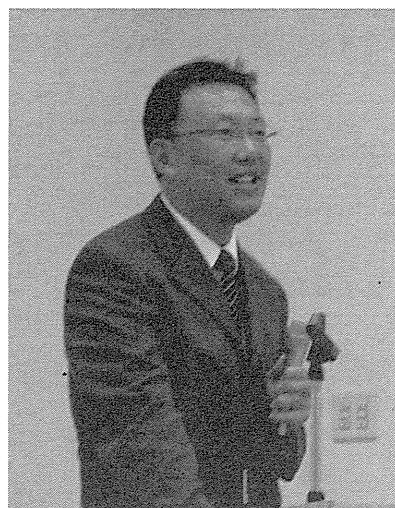
日本での抗うつ薬の市販は海外と比較して10年程度の遅れ（ドラッグ・ラグ）が存在し、問題となっております。この問題の解決が本ガイドラインの大きな課題であり、何が問題の原因で、解決のためにどのような規定を設けたのかについて、具体的に解りやすく解説が行われました。



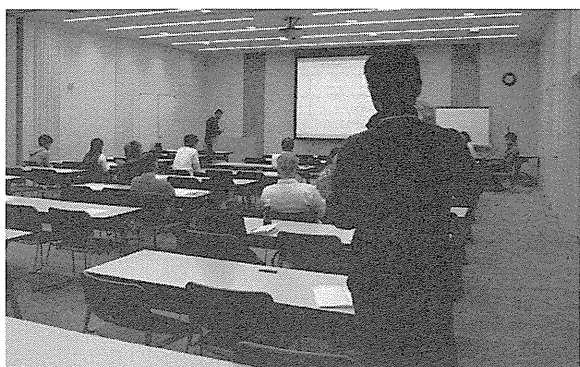
斎藤さんからはうつ病時におけるグルタミン酸神経系の役割の解明を目指した研究について発表がありました。

グルタミン酸神経調節薬（リルゾール）と既存抗うつ薬（イミプラミン）をうつ病モデルラットに投与し、行動性や遺伝子発現の変化についての報告が行われ、既存の抗うつ薬とは異なる作用動態をもつ抗うつ薬の可能性が示されました。

質疑応答も活発に行われ、うつ病モデル動物の妥当性や遺伝子研究の今後の在り方についてなど、幅広い議論が交わされました。



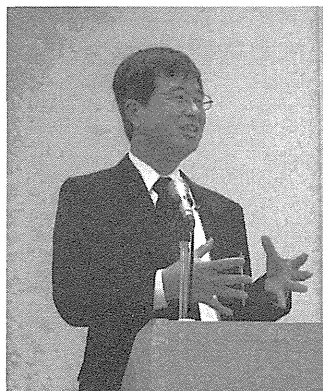
精神保健研究所 精神薬理研究部
斎藤 顕宜



今回の若手カンファレンスでは参加者同士で議論が交わされる場面もありました。また内容もうつ病薬の「市場に出すまでの段階」と「薬品候補を発見した段階」という対照的な発表となり、聞きごたえのあるカンファレンスとなりました。



2010年 実践講座



臨床研究の価値と信頼性

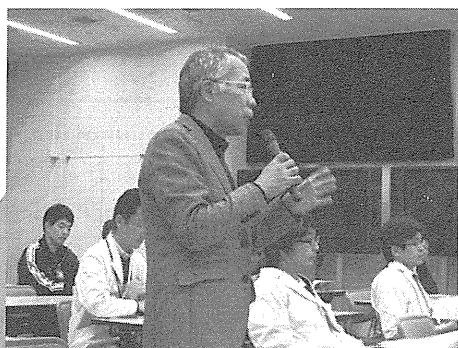
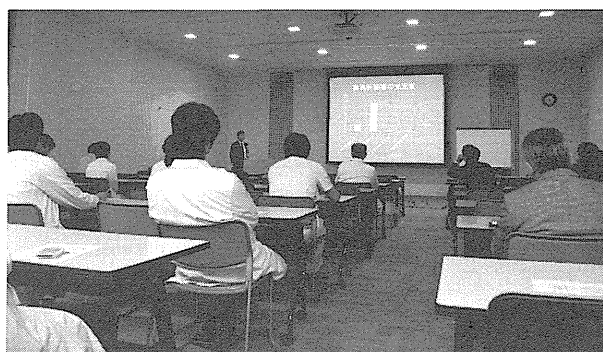
科学性、倫理性そして信頼性

講師：国立精神・神経医療研究センター
臨床研究支援アドバイザー
細井 薫

細井氏は当センターの臨床研究支援アドバイザーとして、臨床研究簡易相談窓口を開設しております。センター内の臨床研究の研究計画、橋渡し研究（トランスレーショナルリサーチ）の企画、医師主導治験の企画などについて、相談を受けており、これまで多数の問題を解決して参りました。

去る10月28日（木）、研究所3号館セミナー室にて細井臨床研究支援アドバイザーによる実践講座が開催されました。臨床研究において科学性、倫理性、信頼性を確保する上でGLP、GMP、GCPといった法規がいかに大切かを例示を多用しながら解りやすく、また細井アドバイザーお得意のジョークを交えつつ講義が行われました。

あいにくの雨模様でしたが、多くの方の参加を頂きました。臨床研究をいかに成功させ、発展させていくかは当センターの大きな課題であり、実験の成功を研究の成功に結びつける、信頼性の担保については大きな関心が寄せられていると感じました。



講義の最後にはセンターの中に臨床研究の品質保証機構が必要ではないかと、斬新かつ有意義な提案がなされました。

質疑応答ではアメリカと日本において臨床研究を取り巻く環境の違いについてなど、活発な議論がなされました。



今後の予定

2010年実践講座

会場：研究所3号館セミナールーム

2011年 1月28日（金） 15:00-	ヒト試料の研究利用と倫理	東京大学 井上 悠輔
	医学研究における個人情報保護	富山大学 松井 健志

東京大学の井上先生、富山大学の松井先生より、医学的倫理についてご講義頂きます。

若手育成カンファレンス

若手育成カンファレンスは、病院と研究所の若手が各自の研究内容を紹介し、意見を交換し、技術や情報を共有する事で臨床研究の質を高め合う事を目的として、ほぼ毎月一回開催されています。

開催日	発表1 担当施設	発表2 担当施設
12月 3日（金）	神経研究所	病院
1月 7日（金）	精神保健研究所	神経研究所
2月 4日（金）	病院	精神保健研究所

過去の報告書は

[センターホームページ](#)>[TMC](#)>[臨床研究活性化のための取組](#)>
若手育成カンファレンスにて公開しています。



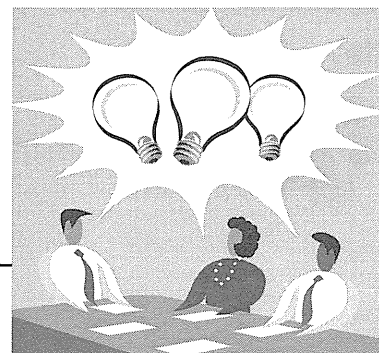
活発な議論が繰り広げられますよう、皆様お誘い合わせの上ご参加下さい。

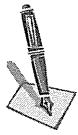
臨床研究簡易相談窓口



臨床研究支援室では、臨床研究を円滑に計画ならびに実施されることを目的として、「臨床研究簡易相談窓口」を開設しています。臨床研究の研究計画、橋渡し研究（トランスレーショナルリサーチ）の企画、医師主導治験の企画などについて、ご相談を受付けております。

対象範囲：	当センター職員による臨床研究の研究計画、橋渡し研究（トランスレーショナルリサーチ）の企画、医師主導治験の企画などの相談・質問とし、基本的には単回の相談を主体と致します。統計相談は、研究段階のものを対象とします。																		
申込方法：	旧インターネットサーバ>TMCからのお知らせ>簡易相談窓口より申込書をダウンロードの上で必要事項を記載し、E-mailにてお申し込み下さい。 直接面談を希望される方は、希望された日で日程の調整をさせて頂いた上でご連絡いたします。なお質問および相談事項につきましては、詳しく記載して頂けますと、事前に調査・検討を行うことが出来ますのでご協力をお願いいたします。																		
相談日：	毎週木曜日																		
相談員：	細井 薫（TMC臨床研究支援アドバイザー、福岡大学臨床研究科学客員教授） 中川 敦夫（TMC臨床研究支援室員） 米本 直裕（TMC生物統計室長）																		
注意事項：	「簡易相談窓口」は倫理委員会の承認を得るための方策について検討する窓口ではありませんのでご了承ください。																		
活動実績： （7月～11月）	<table border="0"> <tr> <td>○臨床研究の計画・・・</td> <td>17件</td> </tr> <tr> <td>（内訳）</td> <td></td> </tr> <tr> <td> 研究デザインについて</td> <td>6件</td> </tr> <tr> <td> 介入法について</td> <td>3件</td> </tr> <tr> <td> データ解析の仕方</td> <td>2件</td> </tr> <tr> <td> 研究計画書の書き方</td> <td>2件</td> </tr> <tr> <td> 研究疑問の整理について</td> <td>2件</td> </tr> <tr> <td> 調査票の作成について</td> <td>1件</td> </tr> <tr> <td> 統計ソフトについて</td> <td>1件</td> </tr> </table>	○臨床研究の計画・・・	17件	（内訳）		研究デザインについて	6件	介入法について	3件	データ解析の仕方	2件	研究計画書の書き方	2件	研究疑問の整理について	2件	調査票の作成について	1件	統計ソフトについて	1件
○臨床研究の計画・・・	17件																		
（内訳）																			
研究デザインについて	6件																		
介入法について	3件																		
データ解析の仕方	2件																		
研究計画書の書き方	2件																		
研究疑問の整理について	2件																		
調査票の作成について	1件																		
統計ソフトについて	1件																		





催し物のお知らせ

山梨大学との連携大学院協定締結を記念して、シンポジウムが開催されます。



国立大学法人 山梨大学

&

独立行政法人

国立精神・神経医療研究センター

合同シンポジウム

平成22年11月29日(月) 15:00-18:20 研究所3号館セミナー室

プログラム

<p>15:00~15:05 開催のごあいさつ 国立精神・神経医療研究センター 総長 樋口 輝彦</p> <hr/> <p>15:05~16:35 Session1 基礎から臨床へ 座長 神経研究所 所長 高坂 新一</p> <hr/> <p>15:05~ 神経伝達物質の放出の動作原理とその破綻 山梨大学 医学部 生化学講座第一教室 教授 大塚 稔久</p> <hr/> <p>15:35~ グリア細胞によるニューロンの異常興奮性の制御 山梨大学 医学部 薬理学講座 教授 小泉 修一</p> <hr/> <p>16:05~ 破局てんかん(乳幼児てんかん性脳症)の 外科治療 センター病院 脳神経外科 部長 大槻 泰介</p> <hr/> <p>16:35~16:45 コーヒーブレイク</p>	<p>16:45~18:15 Session2 臨床から基礎へ 座長 センター病院 院長 糸山 泰人</p> <hr/> <p>16:45~ 遺伝性痙性対麻痺の臨床・分子遺伝学 山梨大学 医学部 神経内科学講座 教授 瀧山 嘉久</p> <hr/> <p>17:15~ 精神遅滞関連疾患のゲノム・遺伝子解析の 現状と課題 神経研究所 疾病研究第2部 部長 後藤 雄一</p> <hr/> <p>17:45~ 発達障害に注目したわが国の子どものメンタル の研究：疫学調査成果から予防的介入へ 精神保健研究所 児童・思春期精神保健研究部 部長 神尾 陽子</p> <hr/> <p>18:15~18:20 閉会のごあいさつ 国立大学法人 山梨大学 医学部長 有田 順</p>
--	---

お問い合わせ先
独立行政法人国立精神・神経医療研究センター
企画医療研究課 TEL042-346-1878

ジャーナルスクリーニングやっています！！



毎週水曜のお昼休み、ランチをつまみながら医学雑誌をスクリーニング。毎週のトピックと世界の流れを楽しく確認しています。

9月29日

Antipsychotic drugs and risk of venous thromboembolism: nested case-control study

Chris Parker, Carol Coupland, Julia Hippisley-Cox *BMJ* 2010; 341:c4245

抗精神病薬と静脈血栓塞栓リスク。新しく投薬を開始してから三カ月以内、低力価薬、非定型薬でリスクの上昇が認められた。

他2報

10月6日

Evaluating the Risks of Clinical Research

Annette Rid; Ezekiel J. Emanuel; David Wendler

JAMA. 2010;304(13):1472-1479.

臨床研究における過剰なリスクから患者を守るためのリスク評価方法について述べています。リスク評価法には4段階のステップがあり、1) 介入による潜在的な危険性評価、2) 危険の大きさの評価、3) 危険の質的評価、4) それぞれの危険性と同程度の強度、質をもった対照との比較、から構成されます。

Implementation of the ICMJE Form for Reporting Potential Conflicts of Interest

Phil B. Fontanarosa; Annette Flanagin; Catherine D. DeAngelis

JAMA. 2010;304(13):1496.

International Committee of Medical Journal Editors (ICMJE)は利益相反についての報告フォームを作成しました (http://jama.ama-assn.org/misc/against_crit.pdf)。今後著名誌への投稿の際ははこのフォームへの記載が求められることとなります。

10月13日

Japan—a call for research papers

Kenji Shibuya, et al.; *The Lancet*. 2010; 376: 1207.

2011年9月にLANCETでは日本の皆保険制度特集を行います。それに際し、日本からのhealth status, health policy, health systems についての論文を募集しております。締め切りは2011年4月15日です。

他2報

10月20日

Reboxetine for acute treatment of major depression: systematic review and meta-analysis of published and unpublished placebo and selective serotonin reuptake inhibitor controlled trials

Dirk Eyding, et al.; *BMJ* 341:doi:10.1136/bmj.c4737

Unpublished dataを含めた、大うつ病に対するReboxetineの有効性をプラセボ及びSSRIと比較したシステマティックレビュー+メタ解析。有効率はプラセボと差が無く、SSRIと比較して劣っており、メタ解析の出版バイアスの問題が指摘された。

他3報

10月27日

Rare chromosomal deletions and duplications in attention-deficit hyperactivity disorder: a genome-wide analysis

Nigel M Williams et.al.; *The Lancet*, Volume 376, Issue 9750, Pages 1401 - 1408, 23 October 2010

遺伝子のコピー数多形 (CNVs) と ADHD の関係。CNVs の発生は ADHD 群で有意に高く、また自閉症、統合失調症と関係する遺伝子座に多く認められる事から、ADHD が社会的要因のみによって発生するものではない事が示唆された。

Tricyclic antidepressants and headaches: systematic review and meta-analysis

Jeffrey L Jackson, et al.; *BMJ* 341:doi:10.1136/bmj.c5222

三環形抗うつ薬は頭痛に効くか。偏頭痛、緊張性頭痛の双方に効果があったが、SSRI やプラセボと比較して副作用の発生も増加した。

Understanding the effect of ethnic density on mental health: multi-level investigation of survey data from England

Jayati Das-Munshi, Laia Becares, Michael E Dewey, Stephen A Stansfeld, Martin J Prince

BMJ 341:doi:10.1136/bmj.c5367

英国における自民族の人口密度がメンタルヘルスに与える影響。精神疾患リスクの低下などが一部の民族グループにおいて認められた。

11月10日

Docosahexaenoic Acid Supplementation and Cognitive Decline in Alzheimer Disease: A Randomized Trial

Joseph F. Quinn et al.; *JAMA*. 2010;304(17):1903-1911.

ドコサヘキサエン酸 (DHA) のアルツハイマー病患者における認知機能に対する効果を二重盲検プラセボ対照試験で検討。プラセボ群との差は認められず。

Fall Prevention in Acute Care Hospitals

Patricia C. Dykes, et al.; *JAMA*. 2010;304(17):1912-1918

転倒防止ツールキットの効果をクラスターランダム化研究にて検証。ツールキットの使用によってコントロールと比較して転倒率が有意に減少した。

Drug harms in the UK: a multicriteria decision analysis

Prof David J Nutt FMedSci, et al. ; *The Lancet*. 2010; 376: 1558-1565

イギリスにおいて薬物ごとの使用者と周囲の人々に与える影響を評価した。ヘロイン、クラックコカイン、メタンフェタミンが最も危険性の高い薬物であった。また、アルコール、ヘロイン、クラックコカインが最も他人への危害を加えやすい薬物であった。

他6報

11月17日

Effects of vitamin E on stroke subtypes: meta-analysis of randomised controlled trials

Markus Schürks, et al.; *BMJ* 2010; 341:c5702

ビタミンEサプリメントの脳卒中への影響を調べたランダム化プラセボ対照試験の結果を、システマティックレビュー及びメタ解析で分析した。全体としての脳卒中リスクへの影響は認められなかったが、虚血性脳卒中リスクの低下が認められ、逆に出血性脳卒中リスクの上昇が認められた。

他1報



場所：7号館3階、治験管理室
日時：毎週水曜日、昼12時～13時

お弁当の持ち込みも可能です！





表紙、背表紙：銀杏（MEG棟横）

TMCcalendar

2010年12月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	若手	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

2011年1月

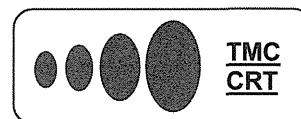
日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	若手	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	講義	29
30	31					

講義…2010年実践講座通常講義
若手…若手育成カンファレンス

ご意見ご感想はこちら E-mail : tmcnews@ncnp.go.jp

独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
トランスレーショナルメディカルセンター
〒187-8551 東京都小平市小川東町4-1-1
TEL.042-341-2711 (代表) / FAX.042-346-1778

編集企画：
掛井 基徳、中川 敦夫
中林 哲夫、松岡 豊
編集企画協力：
石川 有希
編集顧問：
武田 伸一



TMCNews



NCNP Translational Medical Center
Clinical Research Track

コンテンツ

- 第四回若手研究グループ紹介
- 第七回若手カンファレンス報告書
- Meet the Expert
- 実践講座案内
- ジャーナルスクリーニング

Vol. 4

若手研究グループ 紹介

第四回

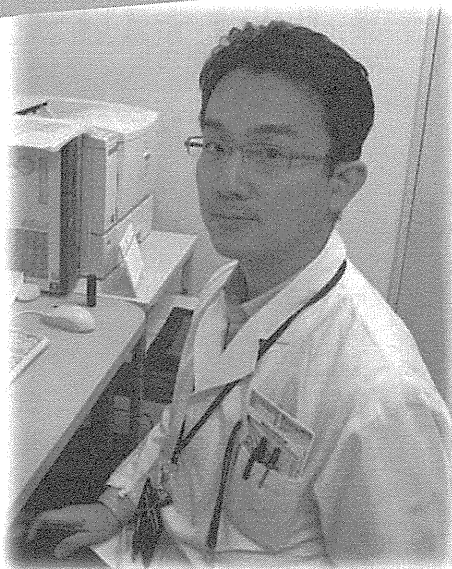
若手研究グループの方々からの、研究に対する抱負や支援活動に対する思いなどを語って頂きます。

山本グループ (B班)

パーキンソン病 嚥下問診表 開発

わたしの研究テーマは、パーキンソン病患者の嚥下障害を評価するために海外で開発された「嚥下障害質問表(SDQ)」(Manor, 2007)の日本語版を作ることです。原著のSDQを評した論文では、「推奨される質問表であるが、他の言語で検討する必要がある」とコメントされておりました(Evatt, 2009)。そこで日本語版SDQを作成し、嚥下造影検査との比較から信頼性を検討しました。研究結果を世界に発信しようと考えています

神経内科 山本 敏之



廣實グループ (B班)

神経筋疾患による失調性構音障害の定量的評価



私の研究テーマは神経筋疾患による構音障害について音響分析を用いて定量的に評価することです。この分野の研究は学際的で、医師部門はもとより、大学の理工学部の研究室や音響分析ソフトを開発するエンジニアの方々との共同研究となります。“msec (ミリセカンド)”で成り立つ音声の世界から外界を見渡した時に人生が見えるのでは？と信じ、昼夜PCに向かう性癖というのがこの研究チームの共通点でしょうか...

リハビリテーション部 廣實 真弓



1月

若手研究グループA班の進捗状況



山野グループ

精神科領域における感覚調整室 Sensory Modulation Room

患者さんの身体感覚に働きかけ、お薬や拘束を行わずに落ち着きを取り戻して頂くための部屋の効果を調べ、使用方法を確立します。

感覚調整室の実施可能性を検討するパイロット研究について倫理申請承認。被験者の募集中。

坂元グループ

パーキンソン病に対するLSVT®BIG推進

パーキンソン病患者さんは身体の動きが萎縮してしまうことが知られています。そこで四肢を大きく動かすトレーニングで患者さんの歩行や動作などを改善するプログラムの効果を調べます。

LSVT®BIGの実施可能性検討のためのパイロット研究について倫理審査承認、試験開始。1月7日の若手カンファレンスにて経過発表。

大柄グループ

精神科病棟における患者が必要とされる看護量の評価尺度について看護必要度とメニンガー患者分類表を用いた評価尺度を試みて

これまで使用されてきた一般診療科用のリストに替わって、精神科の患者さんの症状に応じた看護に必要な時間を調べるためのチェックリストを作成します。

必要看護時間の算定法の一つであるNHPPDについて検討。精神科に特化した手法と世界的なトレンドを確認すべく文献検討を行う。

岩田グループ

デュシェンヌ型筋ジストロフィーの立位訓練についての研究

デュシェンヌ型筋ジストロフィーの患者さんが自宅で立ち上がった姿勢を維持する訓練を行うための機器を導入し、その効果を調べます。

立位訓練のパイロット研究について倫理審査承認。データ収集開始。また、筋ジストロフィーの評価尺度であるNSAAについて導入準備中。

伊藤グループ

転倒転落防止プロジェクト

入院患者さんが病院内で転んでしまう危険度を測定するチェックリストが本当に危険を予測できているかを検討し、より良いものに作り替えます。

現行転倒防止調査票で本年1月～7月に収集したデータで論文執筆中。転倒チェックリストの改良に着手すると共に、転倒防止に向けた介入試験について計画。

Meet the Expert

去る10月26日（火）と11月1日（月）、研究所3号館セミナー室にてMeet the Expert（MTE）第1回と第2回が開催されました。MTEは、当施設外で活躍されている著名な研究者を招聘し、研究との出会い、研究に対する姿勢や情熱、想像力の源、研究を行う必然性など、論文を読むだけでは知ることのできないことを直接お聞きするという主旨で企画しました。外部講師という形式は、前年までのオプションセミナーと似ていますが、全く新しい企画です。

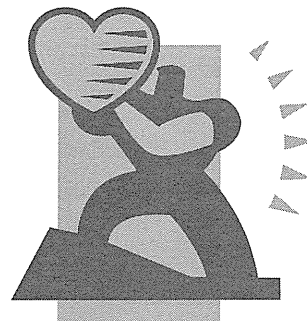
第1回

大阪大学大学院 医学系研究科
情報統合医学講座 精神医学教室

特任准教授 橋本 亮太 先生



第1回は、橋本亮太先生（大阪大学大学院医学系研究科情報統合医学講座精神医学教室の特任准教授）をお招きし、「精神疾患の臨床研究への道—その本質とコツ—」と題したご講演を行っていただきました。「研究は意外に面白かった」という大学院生活を経て、米国国立衛生研究所に留学、精神疾患のIntermediate phenotypeを提唱されたDaniel Weinberger先生のもとで、臨床研究はどうやって行うのかを勉強されたそうです。ご帰国後、当施設でうつ病専門外来を開かれ、大阪大学に戻られてからは、臨床から研究にスムーズに移行する統合失調症専門外来を開設、そして多施設共同研究のフレームとなるヒト脳表現型コンソーシアム活動に至った経緯について、所々でジョークも交えながらお話しされました。異分野との共同研究を成功させるためには、常識、尊敬、正直が必要であり、そして研究の本質は「情熱」、そしてコツは「すでにやっているところで学ぶ」という結論で締めくくられました。



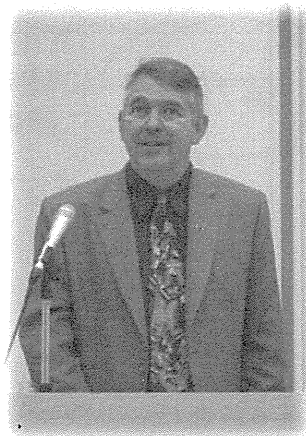
研究を成功させるのは情熱である

Meet the Expert

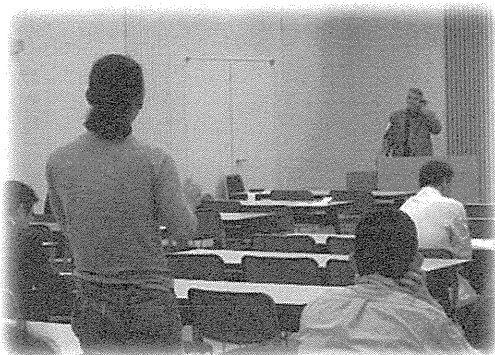
第2回

Acting Chief, Section on Nutritional Neurosciences
in the Laboratory of Membrane Biophysics and Bio-
chemistry at the National Institutes of Health

CAPT Joseph R. Hibbeln M.D.



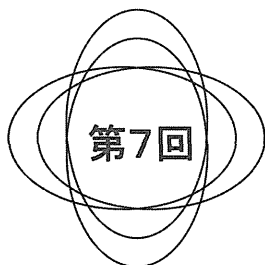
第2回は、CAPT Joseph R. Hibbeln先生（米国国立衛生研究所アルコール乱用／依存症研究所の責任者代行）をお招きし、「Seafood deficient diets: Neurodevelopmental and psychiatric risks」と題したご講演を行っていただきました。米国では胎児へのメチル水銀の影響を考慮して「妊婦はお魚を食べすぎないように」というキャンペーンが張られているそうです。Hibbeln先生は、リスクを過剰に恐れるがあまり、 ω 3系脂肪酸摂取からのベネフィットが下がってしまうという懸念を持たれ、政府に方針転換を迫ることができるような大規模出生コホート研究を行われました。その結果、魚食が少ない妊婦（DHAとEPAの摂取が少ない）では、児の成長発達に悪影響が及ぶことを示されました（Lancet, 2007）。その他、魚の摂取が少ないことと、うつ病の有病率、殺人の発生率が良い相関を示すという生態学的研究の結果や、 ω 3系脂肪酸による自傷行為患者の精神健康改善を目指した臨床試験のデータ等を示されました。人類は古代から魚を意味するシンボルと幸福を関連付けているという例を示され講演を締めくくられました。



橋本先生にはご自身が臨床研究に至る道について、Hibbeln先生には社会的価値を意識した臨床研究の進め方について、お話しただけだと思います。今回のMTEから、講義のビデオ収録を専門の業者に委託しました。知らなかった、都合がつかなかった、など様々な理由で講義に参加できなかった皆さまのために、講義の様子はポータルサイトで後日公開する予定です。

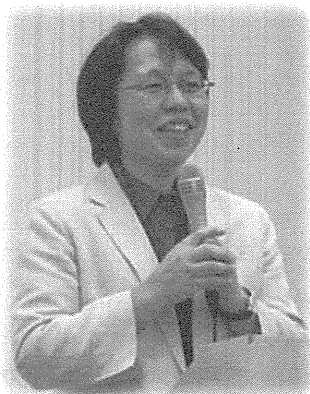


若手育成 カンファレンス 報告書



第7回

2010年12月3日、第7回若手育成カンファレンスとして、神経研究所 疾病研究第七部の森本雅子さん、病院 小児神経科の齋藤貴志さんより発表が行われました。



森本さんからは、人間の可聴域上限を超えて耳には聞こえない超高周波音を用いた、気分障害治療を視野に置いた研究について発表がありました。

複雑に変化する超高周波音を含む音に晒される事で脳深部の活性が上昇するデータを元に、脳深部活性に影響を与える超高周波音の特性の解明と、脳深部活性を測定するための測定法の開発、また実際に身体のどこで超高周波音が受容されているかを調べた検討データについて解説が行われました。

神経研究所 疾病研究第七部
森本 雅子

齋藤さんからは、大脳皮質の層特異的に発現する分子マーカーによる、ヒト大脳層構造の解析手法について発表がありました。

動物実験で用いられる大脳皮質層特異的分子マーカーがヒト脳で確かに層特異的に発現している事を示し、次に実際に大脳皮質構造に異常を生じた滑脳症患者様のご献体を用いた研究データを用いて、層特異的マーカーがヒト大脳の形態形成異常の研究に有用であることを示しました。



センター病院 小児神経科
齋藤 貴志



両研究とも新しい分野の研究や治療、診断にかかわる発表となり、様々な質疑応答が飛び交いました。レジデントの方からも質疑があり、若手育成カンファレンスらしい充実した会となりました。



2010年 実践講座

効果的なプレゼンテーション



講師：国立精神・神経医療研究センター
TMC臨床研究支援室
中川 敦夫

2010. 11. 19

本講義では、効果的なプレゼンテーションのポイントについて説明しました。医療者、研究者にとって、自分が実践してきた臨床や研究を公表することはとても大切な作業です。しかし、プレゼンテーションの準備が不十分であるとせっかくの研究や臨床は、聞き手に十分伝わりません。講義では、プレゼンテーションは単純明快であることの重要性を強調しつつ、スライドのデザインやフォント、発表様式など実践的な内容についても述べました。また、国際学会に参加した際、海外におけるプレゼンテーションのポイントについても自らの経験も踏まえ述べました。

臨床研究論文の書き方

講師：国立精神・神経医療研究センター
TMC臨床研究計画・解析室長
松岡 豊

2010. 11. 24

研究は、それが発表されなければ、何の価値もありません。Tom Sensky教授（Imperial College of Science, UK）による論文執筆セミナーを基にして、臨床研究の成果を外国語論文として発表する時に必要なことについて講義しました。そして演者の経験に基づいた論文投稿から掲載までの流れについても紹介しました

